

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0638 ◆◆◆

21/06/02

【 5 月は今年の月間最小変動、6 月相場に期待したいが…… 】

先日終了した 5 月相場は、月間変動幅 1.86 円。「大相場」への復権を期待していたが、結果は無残にも 2 月の同 2.27 円を下回る「今年の月間最小変動」を記録している。

過去にもレポートしたように、ここ数年のドル/円は 1-4 月までに「年間変動の大半を記録」。残りのあと 8 ヶ月は「ほぼオマケ」といった様相を呈することが少なくないが、そんな過去のトラウマを思い出すような体たらくだ。果たして足もとの 6 月相場は「復権」することができるのだろうか。

◎過去の 6 月は金融・為替関係のニュースも多い、今年も要注意!?

今回の当レポートでは、月初恒例となっている過去の経験則から見た当月の月間見通しを報じてみたい。まずは恒例となっている月間の星取表から見てみると、6 月ドル/円相場の勝敗は 1990 年以降昨年までの 31 年間で 17 勝 14 敗だった。若干ドル高有利ではあるものの、互角に近い内容で目立った特徴とは言えないようだ。

しかし、過去の 6 月相場には興味深いポイントが別途 2 つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。「動く」事例を挙げれば、1 ヶ月のあいだに 13 円以上も動いた 1998 年(高値 146.75 円、安値 133.60 円)になるだろうし、後者の「動かない」事例はと言うと月間変動率がわずか 1.80 円にとどまった 2011 年や同 1.56 円の 2014 年が挙げられよう。

今年がどちらになるのか、正直なところ「神のみぞ知るところ」。前段で指摘したように前月 5 月が今年の月間最小変動を記録したことからすると、その反動を期待したいところだが、果てさて如何に。実際には小動き、「動かない 6 月相場」となる公算がむしろ大きい気もしないではない。

一方、6 月相場におけるもうひとつのポイントは、「一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえる」こと。事実、2000 年以降でみてみると、2008 年までの 9 年間で 8 回が「5 月相場と同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009 年以降 2018 年までの 10 年では 9 回が「逆方向」に動いていた。翻って 2019、2020 年は「順張り」。5 月と 6 月が再び「同じ方向」へと動いている。2000-08 年に見られたパターンに回帰している可能性もあり、だとすると今年は「ドル高有利」ということになりそうだ。

最後に、6 月を「アニバーサリー」の観点、過去の出来事・ニュースなどで見てみると、なかなか興味深いことが幾つかうかがえる。その最たるものは「英国を含めた欧州に関し、重要な出来事が起こりやすい」ということだろう。

一例を挙げると、「欧州通貨制度・EMSを再調整(1982 年)」、「デンマークでマーストリヒト条約批准を否決(1992 年)」、「フランスに続きオランダもEU憲法批准せず(2005 年)」、「アイルランドがリスボン条約の国民投票を否決(2008 年)」、「ECBが初のマイナス金利を導入(2015 年)」――などとなる。さらには、いまに至る混乱を引き起こした「英国が国民投票でEU離脱を決定」したのも 6 月だった(2016 年)。

また、金融市場とくに為替に関する興味深い事象も 6 月は数多い。一部を紹介しても、「英ポンドが変動相場制へと移行(1972 年)」、「日米欧 18 カ国中銀が協調介入(1994 年)」、「ドル/円が戦後初の 100 円割れ(1994 年)」、「日米中銀が為替市場で協調介入(1998 年)」、「ブラジルが事実上の通貨切り下げ(2001 年)」、「ウルグアイが変動相場制へと移行(2002 年)」、「ポンドパニック、一日で対円では 27 円もの暴落(2016 年)」――などとなる。

もちろん、毎年確実に起こることではなく、むしろ特別な事象は起こらないことのほうが多いのだが、ここ最近の金融市場をみると、いわゆるコロナワクチンの接種進展もあり、米国などでは国内経済が目に見えて回復。FRBを筆頭に早いタイミングでのテーパリング期待が強まっている感を否めないだろう。その一方、「沈みゆく日本」ということで、円全面安の様相を呈するなど、波乱を予兆させることも数多い。期待半分、頭の片隅にとどめておいて損はないように思っている。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter